

econ.

No. 26

特集 1952年の大学創設から60年、豊平地域とのかかわりを調べてみよう

豊平と経済学部の60年にみる Q&A

Q1

毎年夏に、
1部経済学部の
ソフトボール大会を
やる月寒公園、昔
はなんだったか
知ってる?

Answer

P2

Q2

今から
100年ほどの前
の平岸、真ん中を
流れている川は
何?

Answer

P3

月寒公園

(財)札幌市公園緑化協会が管理する豊平区の総合公園。明治末期から様々な用途で利用されてきたが、現在は自然林を含む広大な敷地に、野球場やテニスコートなどのスポーツ施設があり、子供から大人まで楽しめる総合公園となっている。本学学生にとっては、ソフトボール大会の会場として馴染み深い。(関連記事は2ページ)

Q3

北海学園大
学の前の平岸街
道、昔は細い道
だったのを知っ
ている?

Answer

P3

連載 板橋君のぶらりゼミ訪問—山田ゼミナール／市川ゼミナール

News 1 1部ゼミ対抗ソフトボール大会／2部基礎ゼミボウリング大会

interview OB訪問—働きマン⑨パックマンアサヅマ 大山翔太さん

News 2 就職情報／財政学合同講演会／基礎ゼミ NIE 講義
地域経済学科創立10周年記念講演会

特集 豊平と経済学部 の60年にみる Q&A

北海英語学校が創立されて127年、また北海学園大学(4年制)創設から60年、本学の歴史は豊平の地域とともに歩んだ歴史でもあります。この地域に残された歴史の跡について調べてみるのも良いかと思います。



Q1 毎年夏に、1部経済学部のソフトボール大会をやる月寒公園、昔はなんだったか知ってる？



月寒公園にある射撃場跡の説明板



1939(昭和14)年 月寒の演習場写真(石川政治氏蔵)：後方に藻岩山の稜線が見える(※右下写真の藻岩山と稜線が同じことがわかる)

A1

月寒公園は、もともと陸軍の演習場でした。明治の終わりに「干城台」と名付けられ、歩兵第25連隊の小演習場として使われました。1905(明治38)年に豊平村に移管され、住民奉仕で整備されました。戦後、旧陸軍射撃用地も加わって広がり、現在は総合公園として市民に親しまれています。上の写真は、1939(昭和14)年に旧制二中(現在の札幌西高校)生徒が、干城台で軍事教練を行った時のものです。1925(大正14)年から各中等教育の機関には、陸軍の現役将校が派遣され、生徒は軍事教練を受けることになりました。右上の写真は北海中学の学生の演習風景です。実戦に近い訓練を行っていました。

ソフトボールの試合が行われる坂下野球場の後ろの小高い丘は射撃場として使われた名残です。いまの姿からは想像もできない過去があるのです。



1941(昭和16)年 月寒射撃場にて



2011(平成23)年 北海学園全景と豊平の街並み：後方に藻岩山がある



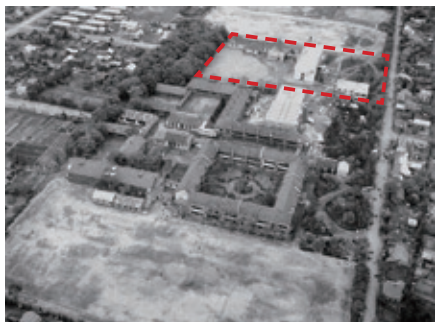
◀ 1909 (明治42) 年 北海中学校新校舎・校庭の整備



1911 (明治44) 年 平岸街道 (北海道庁『東宮殿下行啓記念』より)

Q3

北海道、昔は細い道だったのを知っている？



1958 (昭和33) 年頃 北海学園大学全景 (札幌市文化資料室蔵) : 点線内が大学

A3

北海学園大学の前の平岸街道は、開拓時代、平岸と札幌中心部を結ぶ豊平橋からつづく曲がりくねった細い道だったようです。当時の平岸街道は、現在の道よりも1本東側を通っており、現在の北海学園大学の前の道は、長く補修されず放置されていました。戦後、北海学園大学の前の道が平岸街道からの本道に指定され、1993 (平成5) 年に国道453号線となり、以後道路整備が進められていったのです。

Q2 今から100年ほどの前の平岸、真ん中を流れている川は何？

A2

真ん中の川は用水路です。今はすっかり住宅地の平岸ですが、開拓時代の平岸は、井戸を深く掘っても水が出ず、飲み水の確保に苦労していました。そこで1873 (明治6) 年に平岸街道の真ん中に用水路がつけられ、豊平川の支流精進川から水を引きました。豊平橋の下流まで約5,250mもの用水路でした。

その後明治20年代からりんご栽培が始まり、平岸はリンゴの産地となっていく。畑や水田が増えるにしたがって、1メートル未満だった用水路の幅は4メートルほどに広げられ、平岸の畑や水田をうるおしました。やがて都市化が進み、1960年代には役目を終えて埋め立てられます。

豊平と北海学園の略年表

1857	安政4	豊平川河畔に通行屋が整備され、志村鉄一が定住〜豊平のはじまり
1871	明治4	岩手県人が月寒・平岸・福住に入植
1872	明治5	月寒村・平岸村開村
1873	明治6	札幌本道 (室蘭街道、現在の国道36号線) が開通
1874	明治7	豊平村開村
1879	明治12	平岸街道が札幌本道 (現在の国道36号線) 側に延長されつながる
1885	明治18	北海英語学校創立される
1896	明治29	月寒に陸軍野戦独立大隊 (後の歩兵第25連隊) 設置
1895	明治34	北海英語学校に中学部設置 (旧豊水小学校に)
1902	明治35	豊平・月寒・平岸の3村が合併し、豊平村が誕生
1905	明治38	私立北海中学校 (5年制) を設立、中学部を5年級に編入
1908	明治41	町制施行により豊平町と改称
1909	明治42	北海中学校校舎が現在地に竣工される
1918	大正7	定山溪鉄道開通
1924	大正13	3連アーチの豊平橋が完成、路面電車が運行される
1949	昭和24	各種学校札幌北海学院を開設
1950	昭和25	北海短期大学創設、経済科1部・2部を開設
1952	昭和27	北海学園大学 (4年制) 創設、経済学部1部経済学科を設置
1953	昭和28	北海学園大学経済学部2部経済学科を開設
1961	昭和36	豊平町が札幌市と合併
1969	昭和44	定山溪鉄道廃止
1970	昭和45	北海学園大学大学院修士課程を開設 (経済学研究科)
1971	昭和46	市電豊平線廃止。地下鉄南北線 (真駒内・北24条間) 開通
1972	昭和47	札幌オリンピック冬季大会開催
1994	平成6	地下鉄東豊線、福住まで延長、大学直結の「学園前」駅が開設される
1995	平成7	北海学園大学大学院博士 (後期) 課程開設 (経済学研究科)
2003	平成15	経済学部地域経済学科を開設

定山溪鉄道豊平駅と市電豊平線

かつて、豊平には、札幌市電の豊平線 (すすきの〜豊平駅前) と、定山溪鉄道が走っていました。すすきのから豊平橋を渡って走ってきた市電は豊平駅前停留所が終点で、定山溪鉄道の豊平駅への乗換駅として多くの乗客でにぎわっていました。今でも付近の街並みには駅前商店街の雰囲気があります。北海学園生の通学にも利用されていました。

定山溪鉄道の豊平駅は、1969 (昭和44) 年の定山溪鉄道廃止後も、じょうつつ不動産の事務所として使われていましたが、2005 (平成17) 年に解体されました。今では、国道36号線にかかる歩道橋に残された市電の電停に降りる階段跡が、数少ない当時をしのぶ痕跡となっています。



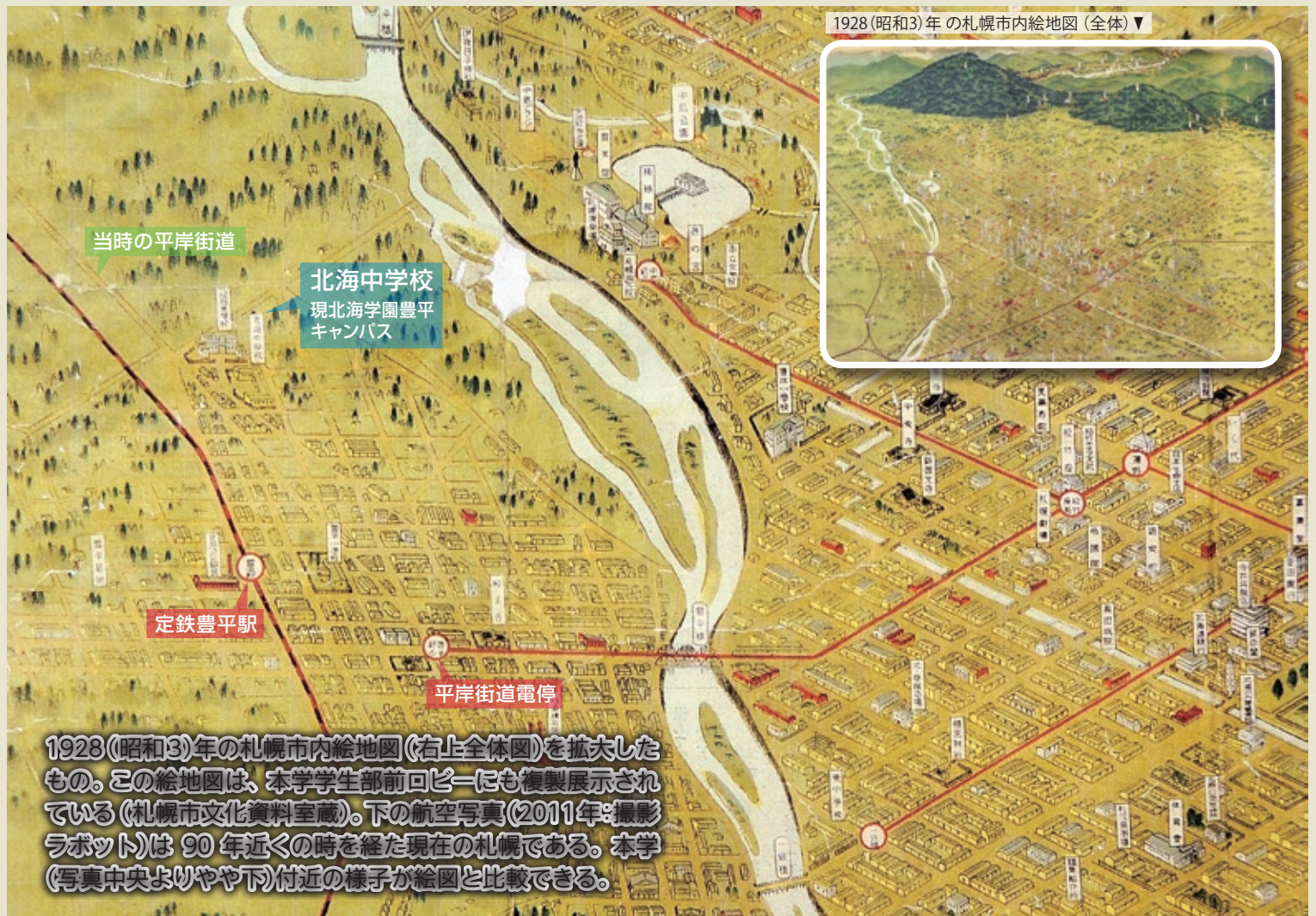
1971 (昭和46) 年9月 市電豊平線・豊平3条8丁目 (札幌市文化資料室蔵)



写真左: 1962 (昭和37) 年 市電豊平駅。写真中: 1964 (昭和39) 年 豊平駅通勤風景 (北海道新聞データベース)。写真右: 2004 (平成16) 年6月 旧豊平駅ホーム (じょうつつ不動産)



1970 (昭和45) 年頃 豊平駅前電停の歩道橋: 1967年に完成した札幌で2番目に古い歩道橋。一番古いのは平岸通り平岸小学校前にあり、1966年に完成した (札幌市文化資料室蔵)





経済学部ゼミナール協議会(経ゼミ協)に所属する板橋君は、夏休みも近い7月のある日、12月に経ゼミ協主催で行なわれる予定のゼミ説明会の下調べとして、地域経済学科の山田ゼミ、経済学科の市川ゼミを訪ね、ゼミの内容について聞いてみました。

地域経済学科

山田ゼミナール



山田ゼミでは、「地域を活性化させる情報発信と地域メディアの役割、また地域ブランドによる地域活性化」などをテーマにして学習しています。

地域の産業や商店街などを応援するため、その情報発信やメディアの在り方などを探求し、直接現場の人たちと触れ合いながら学んでいくことを目的にしています。学生にとって、大手メディアとは異なって地域に密着した情報発信やその活性化などは必ずしも身近なものではありませんが、学生たちも将来生活する地域について考える契機になることを意図しています。

この課題について学ぶ延長線上として、平岸の商店街にもわずかなではありますが関わってきました。一昨年は、平岸中央商店街の店舗で営業されているお店の意識調査アンケートを行い、昨年は、平岸周辺の住民の商店街に対する意識さらに要望調査を行い、供給側と需要側からの平岸商店街の望ましいあり方を探る



左から加藤友靖君、石丸孝君
(共に地域経済学科3年生)

先生とゼミ生との距離が近いのが特徴。共に考えながらゼミが進んでいきます。ゼミテーマは地域メディアですが、地域に根ざした活動を始めた学内サークルと連携して、平岸商店街活性化プロジェクトに参加するゼミ生もいます。

調査を行いました。また、その結果から、札幌市広聴レポーターとして札幌市上田市長に「商店街の地域密着戦略の可能性—平岸商店街の事例から」を報告し(左の報告書、一番上)、「平岸元気会議」も提案もしてきました。

また、山田ゼミでは、「地域研修」の一環としてゼミ調査旅行にも行き、同じテーマで道外の調査訪問も行っています。これまで、道内では室蘭市の室蘭民報とニセコのコミュニティFM、函館のFMい



ニティFMや地域テレビ局など訪問し、ある意味異文化体験のような貴重な体験もしました。



経済学科

市川ゼミナール



市川ゼミでは、前期で主に幕末から明治期を対象に、日本経済史の論文を輪読しています。日本経済史の講義では時間の制約から詳しく説明できない諸問題に加え、若手研究者の論文を中心に読むことで、新たな視角から理解を深めてもらいたいと思っています。日本経済史にとどまらず、当時の時代状況を知る上で必須の様々な事項、たとえば廃藩置県や征韓論などを通じて政治・制度面からの理解を深めたり、金融制度や工場での労働など、欧米の制度が導入されるなかで、どのような問題がおき、それに対しどう消化しつつ、取り込んでいったのかを、論文を通して見ていきます。

すでに幕末の開港から150年以上が過ぎていますが、グロー



バル化や雇用環境の急激な変化に直面する我々にとって、先人たちが、それまでの江戸時代と全く異なるシステムや

生活のあり方にもどう適応し、また発展させてきたかを知ることは意義深いことかと思えます。

後期は大正昭和期を対象に、商社など海外・植民地への展開などにも注目し、輪読を進めていきたいと思っています。三井物産や三菱商事をはじめとする日本の商社は、アジア・北米・欧州・オセアニアに支店を展開し、明治初期には大半が外国人商人によっていた貿易も、明治後期以降は日本の商社が担うようになっていきました。史料の制約から以前は三井物産中心で研究が進められてきましたが、最近では若手研究者によりアメリカ、オーストラリアに残された接収史料など新史料の調査が進んでおり、三井物産だけでなく三菱や専門商社など他の商社の実態も少しずつ明らかになってきています。こうした最新の研究成果にも触れつつ、後期は日本の海外進出について見ていきたいと思っています。

また今後は、地域に残された史跡や史料にも注目し、我々の住む北海道や札幌が、近代日本の中でどう位置づけられていたのか?を考えていくと同時に、地域の歴史、すなわち街の形成や、交通網の発展と経済とのつながりなどにも着目していきたいと思っています。



様々な観点から歴史を見ていくのが面白いです。市川先生は優しく、率直に発言でき和気あいあいとしたゼミです。ゼミの結束も固くソフトボール大会もベスト4でした。



左:ゼミII 斎藤健太君(地域経済学科)、
右:ゼミI 片岡尚也君(経済学科)



1部ゼミ対抗 ソフトボール大会



▲決勝戦に勝ち進んだ山田ゼミ
I・IIと小田ゼミIチーム



6月11日から14日にかけて、(1部)ゼミ対抗ソフトボール大会が月寒公園坂下野球場で開かれました。経済学部ゼミナール協議会の献身的な運営に支えられ、連日熱戦が繰り広げられました。決勝に進出したのは、「小田ゼミI」と「山田ゼミI・II」。晴れわたる青空のもと、見事試合を制し参加60チームの頂点に輝いたのは「小田ゼミI」。小田ゼミIの代表の方は、「このチームで優勝でき、すごく楽しかった。また来年も2連覇をめざしてがんばりたいと思います」とその喜びをさわやかな笑顔で語ってくれました。

天候にも恵まれ、どのチームも練習を積み、惜しむことなく熱い声援を送り、守備に打撃にと一丸となって臨んでいました。ゼミ生の結束を高めるとともに、ゼミ間の連帯を深めるよい機会になったことと思います。来年栄誉を手にするのは、あなたのゼミかもしれません。

2部基礎ゼミ ボウリング大会



6月7日および14日の2回に分け、テイセンボールで2部の基礎ゼミナール生向けボウリング大会が開催されました。今年は合計127名のゼミ生が参加し、熱戦をくりひろげました。まずは、各ゼミ内で3レーンに分かれて、全員で個人戦。お互いに声を掛け合い、自分の所属するゼミ以外のメンバーとの交流も楽しみながら元気にプレーしていました。また、多くの先生も生徒たちと一緒にゲームに参加され、ゼミ生たちとのレクリエーションを楽しんでおられました。

その後は、それぞれ団体戦が行われました。皆、ゼミの仲間のプレーに一喜一憂しつつも、一体となって声援を送り続けていました。なお、それぞれの開催日で優勝したのは川村基礎ゼミBチームと平野ゼミAチーム。平野ゼミはなんと平均スコアが175という高得点での優勝でした。

このように、入学して間もない1年生にとって、ボウリング大会は親睦を深める絶好の機会となったのではないのでしょうか。



▲ハイスコアを出した平野ゼミAチーム



人生は長い。 大学院から社会へ、 まだまだ続く学びの道

大山 翔太さん

おおやま しょうた

今春、本学大学院経済学研究科経済政策専攻修士課程を修了した、ピカピカの社会人一年生。学部生時代に会ったフェアトレードをベースに、人生の夢を描く大山翔太さん24歳！

◀東日本大震災の後、仙台でボランティア活動にも参加。アースカバーで扱う被災地の製品を持って。

フェアトレードとの出会い

今年で6回目になる「フェアトレードフェスタ in さっぽろ」が6月30日、7月1日の両日、大通公園で開催された。フェアトレードとは、1960年代に欧州で始まった、コーヒーなどの換金作物や伝統的な技術で生産された産品を、生産者から適正な価格で購入し販売する公平貿易／公正取引の仕組みをいう。立場の弱い生産者や労働者の生活改善と自立を目指す運動であるフェアトレードの試みについては、この「econ.」20号、22号でも

取り上げられた。このイベントの事務局でもあるフェアトレードショップ「アースカバー」で働く経済学部卒業生大山翔太さんを訪ねた（取材日は6月13日）。大山さんは、フェアトレードと直接の関わりがない企業、同じく大学院で学んでいた福澤康弘さんとの関わりから、福澤さんが副社長を務める三桜アサヅマ株式会社の関連会社バックマンアサヅマ株式会社に7月から就職が決まっている。だが、アースカバーはフェアトレード活動の中心的存在で、本格的就職までの猶予期間を少しでも有効に使いたいと店に立つ事になった。

学部生時代から積極的にフェアトレードの活動に関わってきた大山さん。貧困問題に感心があり、ゼミナールを選択する時にそれが学べるゼミはどこかと探していたところ地域経済学科の平野先生のゼミを知った。「僕は経済学科なので、どうにかして受講したいと、まず訪ねてみようと考えていた時に、たまたま地下鉄でお会いしたんです。約束して研究室を訪ね、発展途上国で貧困の一因ともなっている不公正な経済取引とそれを解決しようとするフェアトレードの話聞き、初めて知りました」。なぜ貧困問題に関心があったのか。「母子家庭だった事で、ちょっと普通の家庭と違うのかなというのがあって、立場の弱い人たちをな

か支援していくような仕事がしたいと思ったのがきっかけです。大学に入ったらそういう勉強がやりたいということと、卒業後は地元に戻り、役場の福祉課や地域経済に貢献しようということ漠然と考えていたんです。けれど、フェアトレードに関わったことをきっかけに、もう少し視野を広げてやってみたいと思ったんです」



ライジングサンロックフェスティバルにフェアトレードの出店

学生時代は本州の「フェアトレードスチューデントネットワーク（FTSN）」というフェアトレード活動の学生団体を知り、他大学の仲間と「FTSN 北海道」を立ち上げる。「学生が出来るような活動、イベントがあった時には出店をして商品を販売したり、日常的にもっとフェアトレードを知ってもらうためにパレード的なものを企画し、みんなで垂れ幕を作って練り歩くというような活動をしていました。学園のなかでもフェアトレードのサークルを作り、大学生協で商品を扱ってもらったりもしました」

さらに学びたいと大学院へ、そして

大学卒業の2010年、岐路に立つ。大学院への進学は、すんなり決めたわけではない。フェアトレードが直結する仕事はほとんどなかった。就職活動も、皆と一緒にじゃないと変なかなという思い、普通に就職して働くというのが無難かと活動していたが、「やっぱりなんか合わない、違う。そこで自分で何がしたいかと考えた時に、もっと知りたい、学びたいということにつながっていききました」

2010年4月、大学院の経済学研究科経済政策専攻修士課程に入学、そして今年3月に修了した。修士論文は「フェアトレードと貧困問題」。一年目がフェアトレードの基礎理論。二年目は貧困問題とフェアトレード。フェアト



フェアトレードの国際シンポジウム（前列右から2人目が大山さん）

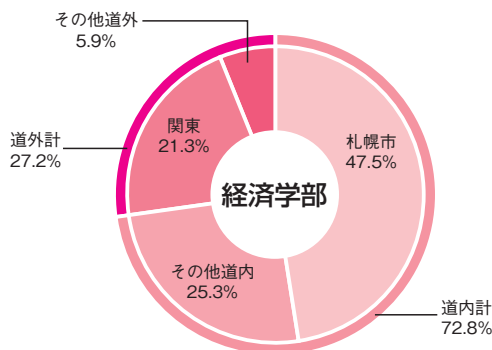
レードの歴史から、欧米、日本のフェアトレードの歴史的系譜、また企業が行っている社会開発型のフェアトレードを研究した。社会開発とは何か、今どういう活動が日本で行われているのか、そして貧困問題へと進んで行った。「フェアトレードって、どうしてもその界限にとどまってしまうような傾向があるように感じ、これからそのフェアトレードの要素を取り込んだ社会にしていけるには、もっと企業とか行政と一体となる必要があると感じていたんですが、なかなかそれが上手く行かない。だったらフェアトレードの範囲を越え、もっと広い世界、社会に飛び込んで行くというのをもひとつなのかなと思います」。やり始めた当初は視野が狭かったが、段々関わっていくうちに、色々と見えて来た。まだまだ見えないことも沢山あるが、少しずつ見えてくるようになり、多様な選択、生き方もあるかもしれないと思うようになった。「就職は大学院で知り合った福澤さんの会社に飛び込んで行く事にしました。フェアトレードを貫くっていうことも大事だと思いますけども、異なる世界に飛び込むのも良しだと思います。独立の願望もありますが、それを具体化していくのはまだまだ先だと思います。まだそれだけの力はないと働いていても痛感するので、それは今すぐという事ではないですね。試行錯誤して軌道にのせて行くというやり方もありますが、どこかまだ踏み込めない自分もいるんです。今を充電期間にし、でも止めないです」。そう言いきった大山さんの活動する姿が、多くの仲間と共に、今年も賑やかに開催されたフェスタ会場にあった。



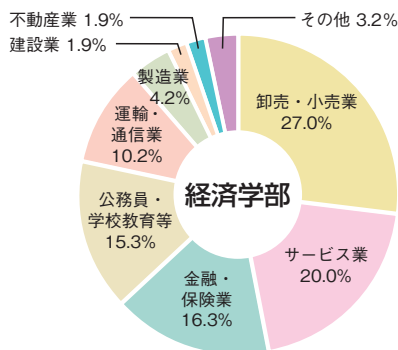
profile
1987年 仙台市生まれ
2006年 七飯高校卒業、本学経済学部2部経済学科入学
2010年 本学部卒業、本学大学院経済学研究科入学
2012年 本学大学院経済学研究科修了

就職情報

↓ 本社所在地別就職状況



↓ 業種別就職状況



↓ 公務員・教員登録状況 [平成23年度卒業生・全学部] 平成24年3月31日現在

名称	人数	名称	人数	名称	人数
国家公務員Ⅱ種	29	北海道職員	4	札幌市職員	5
国税専門官	13	上級	27	技術系	1
労働基準監督官	1	中級	1	学校事務	10
裁判所事務官Ⅱ種	2	上級	1	消防	123
防衛庁Ⅱ種	3	北海道	91	その他市町村	10
自衛隊幹部候補生	7	警察官	12	その他公務員(上記分類以外) ※1	3
自衛隊一般曹候補生	15	女性警察官	7	公立学校教員	81
		札幌市職員	31	国立大学等独立行政法人職員	479
		行政		総計	

※1) 大学別合格者公表のない試験によるもの(本人申告を含む)。入国警備官・刑務官など。

↓ 過去3カ年の主な内定先

[経済学部] ※公務員は合格者数

企業名	人数
北海道警察	40
郵便局	18
北海道銀行	14
生活協同組合コープさっぽろ	12
札幌市役所	12
北海道旅客鉄道	11
北海道(中級)	11
北洋銀行	8
国税専門官	7
札幌市消防	7

↓ キャリア支援センターの主な支援活動

- 個別面談
- ガイダンス(民間・公務員)
- セミナー(面接対策・エントリーシート対策)
- 就職講演会(民間)
- 学内合同企業説明会
- 筆記試験模試(民間・公務員)
- YG性格検査・適職検査(R-CAP)の実施
- インターンシップの斡旋
- 資格取得講座/公務員試験対策講座
- オリジナルポータルサイト「ミナトコム」提供
- キャリアガイダンスの実施(1年次)

[平成24年5月29日] 財政学・地方財政論合同講演会 「我が国の財政の現状と課題」



経済学部では、講義やゼミナールでの勉学を充実させるため、外部から講師をお招きしお話をいただくという取り組みがなされています。この趣旨に沿い、5月29日(火)の1部4時間目と2部2時間目に、「財政学Ⅰ・財政学」(野口剛准教授)と法学部「地方財政論」(横山純一教授)の共催による講演会『我が国の財政の現状と課題』を開催しました。当日は、財務省北海道財務局の山下隆俊検査監理官に、我が国の財政の現状と課題を、債務残高や国民負担率の時系列データや主要国との国際比較データなどを駆使されながら、分かりやすく約1時間にわたりお話しいただきました。そのあとに行われた質疑応答では、消費税ばかり増税対象として注目されているが他の税、とりわけ個人所得税や相続税などについて本当に見直す必要はないのか、見直しているのであればどうしようとしているのか、などといった突っ込んだ議論も行われ、大変充実した講演会となりました。

[平成24年5月] 1部・2部基礎ゼミナール NIE 講義「北海道新聞社出前講座」受講

基礎ゼミナールの定番授業となりつつある「新聞を活用した学習(Newspaper in Education)」が、今年も北海道新聞社「NIE推進センター」の協力を得て行われました。この授業は、経済学部の学生にとって、日々の経済・社会の動きを知るために不可欠なツールとも言える新聞との接し方を学ぶことを目的としています。近年、インターネットの普及によって情報獲得の方法は多様化していますが、新聞とその他の媒体とを比較して、その長所短所が具体的に分かりました。今までどこか近寄りがたかった新聞ですが、記事を全部読む必要はなく、見出しを見ることで何があったかを簡潔に知ることが可能であること、新聞ごとに立場が異なっていて、同じ問題でも扱い方や評価が様々であることなどが分かって、新聞に親近感を覚えるようになった学生も少なからずいたようです。講師からは、記事を読んで見出しをつける課題が出されて、学生たちの真剣に取り組む姿が印象的でした。

● 高山瑛太郎君と小笠原祐斗君が講義の感想を語ってくれました。



「新聞に対する敷居が低くなり、経済面などを読むことで経済を学ぶモチベーションが上がりました」と高山君。「いろんなメディアを読み分ける批判的な視点も必要」と小笠原君。

[平成24年7月6日] 地域経済学科創立10周年記念講演会 「再生可能エネルギーと地域再生」

～資本主義経済の非物質主義的転回と地域の持続可能な発展～

経済学部では来年に地域経済学科創立10周年の節目を迎えます。これにあたり、7月6日(金)に京都大学大学院経済学研究科教授の諸富徹先生をお招きし、『再生可能エネルギーと地域再生—資本主義経済の非物質主義的転換と地域の持続可能な発展—』と題した記念講演会(第1回)が開催されました。ご講演の中では、中山間地域の持続可能な発展の例として愛媛県内子町を、そして地域に根差した再生可能エネルギー事業のモデルケースとして長野県飯田市を取り上げ、地域内で循環する経済システムを構築することの重要性が繰り返し指摘されました。こうした議論は北海道の地域再生を考えるうえで非常に示唆に富むものであり、大変意義のある記念講演会となりました。なお当日は学生、教員だけでなく一般市民の方も数多く来場されたほか、質疑応答も活発に行われるなど、改めて地域経済に対する関心の高さを感じ取れる貴重な機会となりました。

